「松江城及城下古図」の特徴とその表現内容

渡辺理絵・大矢幸雄

はじめに

城下絵図とは、近世期に城下町を描いた絵図の総称であり、城下町絵図と称する場合もある。全国諸藩で、多種多様な城下絵図が作成され、それらは現在、文化財として目にする機会も多い。

松江においても多数の城下絵図が現存している。堀尾氏から京極氏へ、そして松平氏へ藩主が変わった藩政史に照らして研究史をみれば、島根大学附属図書館所蔵の「堀尾期松江城下町絵図」(117×141㎝)はもっとも有名な絵図であり、松尾寿（2008）や西島太郎（2010；2011）の研究に詳しい。さらに京極氏時代の城下を描いたとされる丸亀市立資料館の「寛永年間松江城家敷町之図」についても近年、研究の進展がみられる（西島 2010)。

松平氏時代における個別の絵図の分析については、島田成矩の研究（1971）が先駆的である。同氏は松江市に現存する22点の城下絵図について、個別にその概要を記し、必要に応じて年代推定を行った。そこで提示された城下絵図一覧は、管見では松江城下絵図における所蔵状況を示した初めてのリストである。この後は、しばらく研究の停滞期となり、その間はいくつかの図録や大型本の刊行にともない掲載された絵図について個別の解説をみるにとどまった。

研究が大きく進展したのは平成６(1994)年以降である。島根県教育委員会によって、県内の絵図に係わる本格的な調査が平成６年からの５年間に進められた。主要街道及び航路とその周辺の文化遺産を総合的・体系的に調査された。さらに平成16年、松江で開催された歴史地理学会島根大会では、大会に合わせて、『絵図でたどる島根の歴史』(歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会、島根県立博物館編 2004）が出版され、その翌年には、絵図展示・講演会の開催、『絵図の世界』(島根大学附属図書館編 2006）の出版と多様な事業が展開した。松江市所蔵の「松江白潟町絵図」のデジタル化と報告書（代表舩杉力修 2009）が提出されたのも同時期である。以上のようにここ数年間のうちに絵図調査は大きく前進した。

この動きを一層加速させたのが、平成21年より着手された『松江市史』史料編「絵図･地図」(平成25年度刊行予定）の編纂作業である。刊行にむけた準備作業では市史編纂委員であり、本稿の執筆者の１人である大矢幸雄によって、全国の関係機関について所蔵調査がなされ、新出の絵図の存在も指摘された。この調査によって、松江城下絵図は写しを含めて93鋪（雑賀町を含む)、町屋絵図を入れると117鋪の現存が確認された。

こうした調査は絵図研究のもっとも基礎的作業であり、松江城下絵図研究の出発点である。全国的な所蔵調査が一定の成果を示した現段階において、個別の松江城下絵図に対する理解が研究の次段階として想定される。

そこで、本稿では、三谷健司氏所蔵の「松江城及城下古図」に関する分析を行う。本図は、上記の松江城下絵図群の中で、唯一、長期的な現用状況が確認される絵図であり、元家老の所持した絵図という出自が明らかな絵図でもある。

１．三谷家文書の性格

三谷家は、『松江藩列士録』(島根県立図書館郷土資料2006，57-71）によれば、代々「三谷権大夫」を

名乗り、藩主松平直政以降、８代にわたり家老職をはじめ、各種要職と歴任した家柄である。

三谷家の所蔵文書については、国文学研究資料館史料館（現人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系）と松江市教育委員会によって組織された「三谷家文書調査団」によって、平成14（2002）～15年に網羅的な調査が実施された。本図もこの調査の過程で発見された。調査の概要は、『松江藩家老三谷家文書概要調査報告書』（三谷家文書調査団編 2005）に記載されている。それらによれば、三谷家文書は近世・近代文書で占められ、文書が収納された箪笥や箱などは96にのぼるという。１点ごとの史料についての情報はまだ一般公開されていないが、文書の特徴として、時代範囲は近世中期からごく近年のものまであり、内容的には家老職に関わる江戸期の家文書を中心に、当主・家族の個人文書、書簡、ノート、書籍などが大半である。その反面、松江藩の藩庁文書と見られるものはごく少数しかない。このことは、明治維新の際などに多数の文書記録を失ったとする伝来と整合する。なお、この報告書から知りうる絵図としては、版行図と思われる大坂図や京都図のほかに、「御出張之節楯縫郡国富村御宿図面」や10点の三谷家上・下屋敷図が含まれている。

２.「松江城及城下古図」の特徴

150×102cmの法量（サイズ）をもつ本図は、手描き彩色の城下絵図である（**図１**）。道および広場などを黄色で着色し、屋敷内は白地で、輪郭線を墨書きしている。河川などの水系を紺色で、土居や草地などは蓬色で着色されている。城下に接する湿地や山々などは景観描写されている。また城郭内部の石垣および長壽寺、春日神社、東岳寺（＝洞岳寺）、月照寺、清光院などの社殿は立体的に描かれる。

描く範囲は大橋川以北であり、白潟地区や雑賀地区は含まれていない。武家地は屋敷割ごとに家臣名が記載されている。また随所に貼紙を付して修正をはかっている。町人地は、町のブロックごとに描かれ、「町」とのみ記載される。

図１　「松江城及城下古図」（三谷健司氏所蔵）150×102cm

絵図のところどころに風景描写がみられる。田植えの風景、宍道湖での漁、奥谷の春日神社の紅葉、松の樹木の間にみえるのは、梅か桜か、あるいは雪を冠した樹木を表現しているのであろうか、季節を特徴づける描写が印象的である。

本図は、右筆によると思われる文字の書き入れや松平家の家老職を世襲した三谷家に伝わった絵図であることから、公的な性格を帯びた絵図と考えられる。

３.「松江城及城下古図」と年代推定

この図について、島田成矩は「華麗、繊細な特質があり」「一級品」であると評したうえで、「作成年代が不明であったが」、『松江藩列士録』によって寛文10（1670）年～宝永７（1710）年と成立年代を推定した。

本図には、多くの貼紙が確認でき、成立時の状況との齟齬を修正した痕跡が確認される。現況から修正の方法は２通り確認できる。１つは前時の貼紙を剥がし、新しいものを貼付する。他方は、代替わりなどによって名前のみに変更があった場合に、名前の部分のみに小紙片を貼付する方法である。こうした絵図については、成立時と修正時の年代を推定することによって、絵図の利用状況がより明確になる。

まず、成立時について検討したい。もともとの和紙に描かれた地物や家臣名からその年代を推定する。図中には、寛文４（1664）年に再興された月照寺（外中原町）が描かれている。また普門院（母衣町）の南側には堀割が見える。これは元禄２（1689）年以降に開削された。また、城下北の外延部には萬壽寺（1737年に改名）の部分には、長壽寺と記載がある。この段階で絵図の作成年代は1689～1737年中と推定される。

さらに年代を絞るため、次に家臣の戸主としての期間を参考にする。ただし、絵図自体に書き入れられた家臣名は極めて限定的で、城郭東に面する一角のみである。記載のある「熊谷主殿」「今村平馬」「柳多主計」などは、いずれも家老級の大身である。このうち、後者２名は年代を絞る上で適している。今村平馬は、寛文10（1670）年に家督を継承し、寄合組御番頭役や大御番頭役などを務めたのち、元禄９年より家老となり、宝永７（1710）年に武蔵で亡くなった。「柳多主計」は天和３（1683）年に家督を継承し、同年に家老となり、元禄５（1692）年に山城で亡くなっている。両

表１　「松江城及城下古図」の貼紙記載の人名の戸主としての期間

人名	千石猪右衛門	坂根八右衛門	河合観之助	市川和助	中村五左衛門	渡部市太夫	三谷茂助	富永庄助	正井道有	三田村平助	中根常盤	赤井久右衛門
所在	内中原	田町	田町	外中原	外中原	田町	南田町	奥谷	内中原	内中原	奥谷	田町
↓年号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1630												
1635		■										
1640		■										
1645		■										
1650		■										
1655		■										
1660		■										
1665		■										
1670												
1675												
1680												
1685							■					
1690				■			■					
1695				■			■					
1700				■			■					
1705				■			■					
1710				■			■					
1715				■			■		■			
1720				■		■	■		■			
1725				■	■	■	■		■	■		
1730				■	■	■	■		■	■		
1735				■	■	■			■	■		
1740			■	■	■	■			■	■		■
1745			■	■	■	■			■	■	■	■
1750			■	■	■	■	■		■	■	■	■
1755		■	■	■	■	■	■		■	■	■	■
1760		■	■	■	■	■	■		■	■	■	■
1765		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
1770		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
1775	■	■	■	■	■		■	■	■	■	■	■
1780	■	■	■		■		■	■	■	■		■
1785	■		■		■		■	■				■
1790	■		■		■		■	■				
1795	■		■		■		■	■				
1800	■		■		■			■				
1805	■		■		■			■				
1810	■		■					■				
1815	■		■					■				
1820	■		■					■				
1825	■		■					■				
1830	■		■					■				
1835	■		■									
1840	■		■									
1845	■		■		■							
1850	■		■		■							
1855	■		■		■							
1860	■		■		■							
1865					■							
1870												

□は、もっとも重複する年次の範囲　島根県立図書館郷土資料（2004～2006）『松江藩列士録第１巻～第６巻』島根県立図書館．により作成.

者の戸主としての期間によれば、本図の年代は1683～92年中まで絞り込める。17世紀末は松平綱近の治世であった。

絵図作成年を限られた方法によって推定した上で、次に貼紙に記載された家臣名から貼付がいつ頃まで続いていたのかについて検討したい。

表１は、貼紙に記された12名の人名の戸主としての期間を示している。抽出した12名は、『松江藩列士録』（島根県立図書館郷土資料 2004～2006）に掲載があり、２代以上の同名の踏襲がないこと、城下の特定の一角に偏重しないように、まんべんなく城下から抽出することに留意した。

この表から、12名の戸主としての期間がもっとも重複する範囲は、1765～1775年（明和２～安永４年）であった。

したがって、本図は成立してから短くとも約70年程度の現用期間があったと解される。ただし、現用主体は１つに限られない。藩庁で使用された後、何らかの理由で三谷家へ移譲され、三谷家によって修正が施された可能性もある。事実、貼紙に記載された筆致は、原図のそれよりも粗い。城下絵図は頻繁に作成できないだけに、現況との不一致を修正しながら利用され続けた。本図は、現用主体が異なる可能性はあるものの、その現用期間は、20～30年とする福岡や明和期の米沢城下絵図の15～20年の例と比較すると、長期的な利用の一例となる。

図２　縮尺測定の地点
（面谷明俊氏作成「松江城及城下古図」トレース図に番号、矢印を筆者が加筆）

４.「松江城及城下古図」の縮尺

絵図は、現在の地図のような測量や作図法などの作成技術に基づいてつくられたものではないが、一定の作成にかかわる約束の中で描写された。川村博忠によれば、たとえば「方位を正す」、「縮め方を一定にする」、「記号を使用する」などである（川村1992,1)。この中で「縮め方を一定にする」という約束は、絵図の縮尺にかかわる。江戸時代、実測によって縮尺をきめて作成した絵図を「分間図」と呼んだ。「分間」とは１間を１分で表す（600分１）という語意である。「分間図」であるかどうかは、図中に付記されている場合もあるが、そうした記述のない場合は、縮尺を算出する。縮尺は絵図の測量精度と関わり、当時のその地域(藩)の絵図作成技術の水準を示唆する点で、絵図研究においては重要である。そこ

表２　「松江城及城下古図」の各地点の縮尺

地点番号※	線分の方向	縮尺（cm）	城からの距離（各線分の中間地点）m
①	南北	2989.9	218.2
②	南北	2174.5	703.0
③	南北	2179.3	812.1
④	南北	2591.2	593.9
⑤	南北	2256.5	400.0
⑥	東西	1793.9	1042.4
⑦	東西	1567.1	484.8
⑧	東西	2033.1	424.2
⑨	東西	1636.6	921.2
⑩	東西	1594.6	884.8
	南北方向の縮尺平均	2438.3	
	東西方向の縮尺平均	1725.1	

※地点番号は図２に対応

で、本節では「松江城及城下古図」の縮尺について検討する。

まず本図と大正４年測図・大正７年発行の25000分１地形図「松江」（国土地理院発行）との対照において、比定できる地点を10カ所選定した（**図２**）。地点は偏在しないよう、まんべんなく選定することを念頭においた。これらの地点の縮尺を示したのが**表２**である。ここから10地点の縮尺は一定でないことがわかる。もっとも小縮尺な①ではおよそ3000分１であり、もっとも大縮尺な⑦ではおよそ1500分１と両者の間には大きな開きがある。

では縮尺のばらつきにはどのような傾向があるだろうか。かつて矢守一彦は米沢城下絵図について、城に近接するほど大縮尺で、周辺ほど小縮尺に描かれている点を指摘した（矢守1974,106）。この点を検討するため、10地点と松江城との距離を**表２**に併記した。結果、本図の縮尺において、中心と周辺という関係性は看取できない。むしろ、縮尺のばらつきは、選定した地点（線分）の方向に関係している。すなわち南北にとった地点（線分）は、東西方向で選定した地点（線分）に比較して、小縮尺の傾向がある。①～⑤の南北に設定した地点（縮尺）の平均は、1:2438（cm）であるが、⑥～⑩の東西に設定したそれは、1:1725（cm）であった。つまり、本図は南北方向に圧縮され、東西方向に伸ばされているようなイメージである。このような縮め方は、描かれた範囲の地理的形状に影響されると考えることができる。本図は大橋川以北のみの描写であり、作図の主眼が郭内にあったとすれば、それは東西に延伸する形状を示す（郭内：南北間およそ1.1km・東西間およそ２km）。さらに郭内の屋敷の多くは、東西方向に長い。その屋敷割の中に氏名を書き入れる作業は、東西方向をより大縮尺にする方が適していたと考えられる。

江戸時代の刊行都市図にも類似の工夫をみることができる。たとえば、江戸図では西を上に、大坂図では東を上にして描かれている例が多い。この点に関して、矢守一彦は「地形やそれに規制された市街の形状によって、紙に対する図柄のおさまりぐあい、紙幅の節約なども同時に考慮された」ためと解釈している（矢守1974,136）。

５.「松江城及城下古図」に描かれた松江城下町の景観

本図は屋敷割図としての性格を持ちつつも、屋敷割以外に多様な地物が描写されている。本節では、本図に描かれた屋敷割以外の表現に注目したい。

⑴　城郭

屋敷割図としての特徴を有した城下絵図の中には、近世中期以降は、城郭内を空白にしている絵図が少なくないが、本図は城郭内の情報が豊富である。

本丸には城が描かれ、それを取り囲む石垣や各櫓などが表現されている。試みに、本図より以前に作成された出雲国松江城絵図（国立公文書館所蔵・以下、正保城絵図とする）と本図とを比較すると、城や櫓の階数などについて差異が認められる（**図３**）。まず、天守については正保城絵図では千鳥破風に描かれているが、本図では判然としない。天守そのものの描写が正保城絵図と比して粗いことは否めない。天守の直下に樹木を描き、あえて不明瞭にしている印象さえ受ける。また、周囲にめぐらされた折塀の形状も異なる。しかし本図の折塀は、元文３（1738）年に幕府へ修理願として提出された「松江城郭図」や安永７（1778）年の「松江城郭古図」とは類似している。さらに、出丸や搦手門付近についても大きな差異がある。出丸に「侍屋敷」と記載された正保城絵図に対して、本図では「北之丸」と表記され、西側には「足軽」と「岡田権三助」（『松江藩列士録』には記載なし）とある。城郭北には「下御殿」と表記され、また搦手門付近には柵がめぐらされ、３つの建造物が認められる。

中曲輪と腰曲輪の間には、馬洗池が描かれている（**図４**）。山根正明によれば、この池は築城に際し設

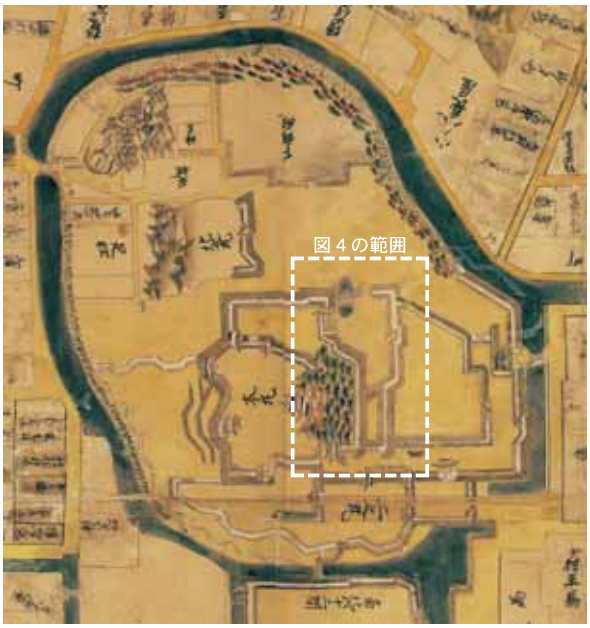

図３　正保城絵図と本図の城郭部分
出雲国松江城絵図（国立公文書館所蔵）および「松江城及城下古図」より作成

けられた２つの堀切の合流地点にあり、東側の北惣門付近から食い込んだ谷地形の谷頭(最上流部)の湧水をせき止めることで形成されているという（山根2009, 70-74)。すなわち、築城由来の池であることを示唆する。正保城絵図には描かれていないが、元文３(1738) 年の「松江城郭図」や安永７(1778) 年の「松江城郭古図」に描かれ、明治期の実測図にも確認できる。

図４　「松江城及城下古図」の馬洗池および水ノ手門
「松江城及城下古図」より作成　　※上が西

水ノ手門の描写は、従来の松江城郭史のなかで１つの重要な局面となっていた。正保城絵図ではこの水ノ手門から直進して入る造りとして描かれ、この点を根拠として、正保期から元禄期にかけて松江城の大規模な改修を示唆すると解釈された（文化財保存計画協会編1996, 64)。一方で、堀尾期の絵図には、現状のように水ノ手門から西方向に直進し、右折して北方向へ進んだところに入口が設けられている。ここに絵図表現の矛盾が指摘されたのである（山根2009, 91-94)。本図では、現状のように西方向に延びた階段を右折して北方向に進む階段が描かれている。

本図で取り上げた絵図上の表現は、天守を除いては後世の絵図や測量図に描かれた構造物と近似していることが見いだせた。

⑵　城下町

①　植生表現

本図には多くの植生表現が散見される。国谷村や奥谷、松崎御茶屋（現春日町摩利支神社付近）の小高い山地表現はもっとも目をひく。春日社に描かれた樹木は紅葉であろうか。明治後期の同地の絵葉書写真には、たくさんの紅葉が写し出されている（今岡編2012, 131)。その他にも城下には特徴的な表現が見える。たとえば、大橋川に架かる橋のたもとには、１本の柳の木が描かれている（**図５**)。この木につ

いては、「松江末次本町絵図」（元禄年間1688～1704）（安政３年（1856）写）にも同地に「柳」とあり（島根大学附属図書館編2006,33）、また、藩の御用絵師であった陶山勝寂によって描かれた「松江四季眺望図」（明治７年調整）にも描かれている（松江歴史館編2011）。

さらに塩見縄手周辺には石垣はなく樹木による土手が続く。また宍道湖岸の国谷郷へ通じる街道沿いには松並木、四十間堀の土手、普門院南の後に台所長屋が置かれる一角の樹木、北田町や大橋茂右衛門屋敷東側の葦原などは、いずれも特徴的である。

絵図は、過去の景観をあるがままに描いたものではなく、作成主体があるがままの景観から取捨選択した図像であり、ある価値体系にもとづいてイメージ化された図像である（小野寺1995,21）。この文脈にしたがえば、本図に描かれた植生表現も、現実の景観の中から、何らかの価値体系のもと、作成主体があえて取り上げたものと言えよう。たとえば、大橋たもとの柳の木は一種のランドマークとして映っていたことは想像に難くない。また春日社の紅葉は四季を特徴づけるものとして、葦原は松江の城下町景観を作り出す要素として、作成主体が捉えていたとも推察される。こうした表現は、作成主体の当時の松江城下町のイメージを写し出すものとして興味深いだけでなく、当時の松江の城下町景観を知りうる貴重な図像となっていることは間違いない。

②　城下町の各種施設

大橋たもとには「制札」が見える。「松江末次本町絵図」（元禄年間1688～1704　島根大学附属図書館蔵）（安政３年（1856）写）にも、同地に「御制札」が記されている。同じく末次地区の西端には木戸が確認できる。「松江末次町絵図」（明和７（1770）年作成・昭和14年複製　個人蔵）には同地に木戸と同意である「関貫」がみえる。

一方、奥谷には井戸と思える描写が２カ所ある（**図６**）。町屋の各種絵図には、借家敷地に共同で利用されたと思われる井戸がいくつも描かれているが、武家地での記載は稀である。

③　末次湖岸の石垣

宍道湖に面する末次地区南端には、石垣の描写がみえる（**図７**）。この石垣については、本図より以前に作成されたとされる島根大学附属図書館所蔵の「堀尾期松江城下町絵図」と京極期の絵図とされる「寛永年間松江城家敷町之図」（丸亀市立資料館蔵）とでは描写内容が異なることから、石垣の成立をめぐって検討がなされてきた。すなわち、堀尾期の絵図では石垣の描写がみられるのに対し、京極期では同部分に「土手」と記載され、石垣は確認できない。さらに延享年間の「松江城下絵図」（島根県立図書館）では、石垣・土手の両者とも記載がない。これらの違いから、堀尾期の絵図に描かれた石垣は、計画段階とし、石垣の成立は19世紀以降とする見方もある（西島2010,62-63）。

この点に関連する史料として、「瀧川公用控」（年によって「萬覚帳」となる）がある。城下町の有力商人であった瀧川家が藩からの指示や公務内容を留めた記録で、全11冊におよぶ。この中の第２巻に以下のような記述がある。

末次海端石垣改荒和井
灘通水潟石垣改、宝暦三酉三月、生田十兵衛様、栗田祖右衛門様、倉橋義八様
御船ニ而御改ニ御廻り立合相済、其節末次海端下より荒和井迠之内

宝暦３（1753）年に石垣改を行ったことに関する記述で、その範囲は「末次海端下」から「荒和井」ま

でである。『松江八百八町町内物語』（荒木1973,23）では、荒隈堤は洗合鼻（天倫寺下）から瓢箪町（現在の東本町）までと記載されている。先の文書では「御改」が末次海端下から荒和井までの範囲と読み取れることから、ここでは「荒和井」は帯状の範囲を示す地名としてよりは、一地点を表す名称で用いられていると考えたほうがよい。おそらく、末次湖岸よりも西の四十間堀南付近を指していると思われる。

末次湖岸は、天倫寺下あたりから東に延びる砂州の一部であったと考えられる。２万５千分の１地形図をみると、宍道湖湖岸に沿って流れる沿岸流の動きをみることができる。さらに同地形図からは斐伊川から宍道湖を通って大橋川に抜ける水流の主流が、嫁ヶ島から大きく蛇行し，白潟天満宮の沖から北に向きを変えて、松江大橋の吐口へと向かう流れを見ることもできる。こうした自然地形を考えると、末次湖岸は、砂州が形成される場であるとともに，嫁ヶ島方向から北に向かう主流が直撃する場となっており、湖岸地形が変化しやすい特徴を有していることがわかる。強い冬の季節風が起こす高波も湖岸地形の破壊の誘因となったことは想像にかたくない。本図にも末次湖岸を直撃する波の描写がみえる。こうした特性をもつ末次湖岸に対して、護岸は早い段階から進んだと考えたほうが自然である。当然、護岸の損壊と補修は繰り返されたとみられ、「瀧川公用控」にも石垣の補修が数度行われたことが記述されている。

⑶　城下町周辺の表現

城下町周辺の四十間堀西側では、農作業風景が描かれている（**図８**）。一列に並んでの作業は田植えであろうか、また農具をもっての作業は田起こしを模したようにみえる。

さらに、奥谷の西側には２種類の水鳥が描かれている（**図９**）。城下周辺は、湿地あるいは湿田であったという。そこには水鳥の餌となる生物や水草もあったに違いない。

⑷　河川・宍道湖

北田川および大橋茂右衛門屋敷の東側の水面、さらに大橋川には漁をする人物の姿が描かれている（**図10**）。①では、早春の白魚漁で用いられる四ツ手網漁のように見える（安部登監修2004,71-72）。『雷電・御船屋・漁師町：松江市東本町五丁目町内会誌』（松江市東本町五丁目町内会編1981,15-16）によれば、江戸時代には大橋川が中海に注ぐ付近で白魚がよく採れたという。また②ではエビやウナギ漁の際に用いられる筌（せん・うけ）と思われる漁具が描かれている（西田2011）。そこは立って漁ができるほどの浅瀬であった。さらに、①にみえる３艘のうち、２艘は舟の先端が反り返っているソリコ舟に近い。こうした漁法や漁具の様子は、民俗学的にも興味深い。

また、同書によれば、明和期に末次と白潟の漁師頭が町役所にだした「口上之覚」に漁場の変化について記してあるという。それによれば、大橋川を中心に天神川から北は川津の乙部下屋敷前まで漁場が広がっていたが、新田開発によって70～80年前と比較して５分の１ほどに減少したとされる（松江市東本町五丁目町内会編1981,26-27）。この口上に従えば、70～80年前はちょうど本図が作成された時期にあたる。それと整合するように、漁は大橋川や乙部家下屋敷前で展開している。

むすびにかえて

以上、三谷家所蔵「松江城及城下古図」について、史料学的、絵図学的見地から特徴を抽出した。本稿で得られた知見を集約すると、以下の３点である。

１点目は、本図の成立は1683～92年頃であり、その後、貼紙によって1765～1775年頃まで修正が続い

たと考えられる。２点目は、本図は分間絵図のような一定の縮尺のもとに作成された絵図ではなく、南北に圧縮されたような構図となっている。３点目は絵図に描かれた表現内容は、一部を除いて後世の絵図・地図の描写内容や同時期の文書史料の内容と整合する。

とりわけ、３点目の知見は絵図の本質的議論に関わる。絵図は、作成主体が現実の景観から取捨選択した図像の集合とみなせる。選択の過程で、不要とされた景観は絵図上には表現されないこととなるが、それは当時の空間上に存在しなかったことを示すものではない。逆に選択された図像でも、それらが実在に近い様相で絵図上に再現されているとは限らない。意図的に異なった様相で描かれている場合や、想像上の場合もある。このため、絵図に描かれた図像が、当時の景観を示すものであるかは、慎重な検討を要すわけである。こうした注意を払いつつ、本図は今後、当時の松江の景観を復元する際の有力な絵図史料として位置づけられることになろう。

以上のような特徴を持つ本図は、現存する松江城下絵図群の中で、松平期に作成されたもっとも古い藩用図とみなせる。さらに、本図は延享年間に作成されたとされる「松江城下絵図」（島根県立図書館所蔵）に継承される。今後は、こうした同系統の絵図に着目しながら、個別事例の蓄積が課題となろう。

参考文献

青砥可休（1863）「松江湖漁場由来記」山田龍雄ほか編（1997）『日本農書全集59巻－松江湖漁場由来記（出雲）－』農山漁村文化協会。

安部登監修（2004）『松江・安来今昔写真帖：保存版』郷土出版社。

荒木英信（1973）『松江八百八町町内物語』（郷土シリーズ４）末次の巻、島根郷土資料刊行会。

今岡弘延編（2012）『今岡なつかしの松江：明治・大正・昭和初期絵葉書コレクション：松江絵葉書MUSEUM』ワン・ライン。

小野寺淳（1995）「絵図に描かれた自然環境－出羽国絵図の植生表現を例に－」歴史地理学172、21-35。

川村博忠（1992）『近世絵図と測量術』古今書院。

島田成矩（1971）「松江城城下図　調査報告書　昭和四十六年一月」私家版。

島根県立図書館郷土資料（2004）『松江藩列士録　第１巻』島根県立図書館。

島根県立図書館郷土資料（2004）『松江藩列士録　第２巻』島根県立図書館。

島根県立図書館郷土資料（2005）『松江藩列士録　第３巻』島根県立図書館。

島根県立図書館郷土資料（2005）『松江藩列士録　第４巻』島根県立図書館。

島根県立図書館郷土資料（2006）『松江藩列士録　第５巻』島根県立図書館。

島根県立図書館郷土資料（2006）『松江藩列士録　第６巻』島根県立図書館。

島根大学附属図書館編（2006）『絵図の世界 ： 出雲国隠岐国桑原文庫の絵図』㈱ワン・ライン。

西島太郎（2010）『京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会。

西島太郎（2011）「「堀尾期松江城下町絵図」の制作工程と伝来」日本歴史755、85-89。

西田友広（2011）「中世松江の「筌（うけ・せん）」漁業」松江市ホームページ、URL　http://www1.city.matsue.shimane.jp/k-b-k/bunkazai/shishi/colum/colum10-1.html（最終閲覧日2012年10月24日）

舩杉力修（2009）「城下町の景観の動態的変容に関する歴史地理学的研究－デジタルコンテンツ化を通して－」科学研究費補助金研究成果報告書：研究課題番号：18682004・代表者2006年度～2008年度。

文化財保存計画協会編（1996）『石垣調査報告書：史跡松江城』松江市教育委員会。

松江市東本町五丁目町内会編（1981）『雷電・御船屋・漁師町：松江市東本町五丁目町内会誌』山崎勝義。

松江歴史館編（2011）『雲州松江の歴史をひもとく：松江歴史館展示案内』松江歴史館。

松尾寿（2008）『城下町松江の誕生と町のしくみ』松江市教育委員会文化財課。

三谷家文書調査団編（2005）『松江藩家老三谷家文書概要調査報告書』松江市教育委員会文化財課。

矢守一彦（1974）『都市図の歴史－日本編－』講談社。

山根正明（2009）『堀尾吉晴：松江城への道』松江市教育委員会。

歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会、島根県立博物館編（2004）『絵図でたどる島根の歴史』島根県立博物館。

図５　絵図にみる植生の表現

左：大橋たもと　　中央：四十間堀南　　右：月照寺前

図６　奥谷の井戸の描写

図７　末次湖岸に描かれた石垣

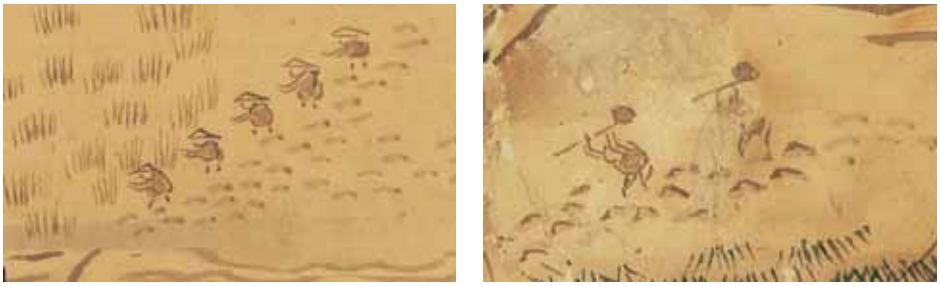

図８　四十間堀西側の農作業風景の描写

図９　城下町周辺に描かれた水鳥

漁の風景①

四ツ手網漁か？①

筌を使っての漁②

四ツ手網漁か？③

各図像が描写された位置
⇩

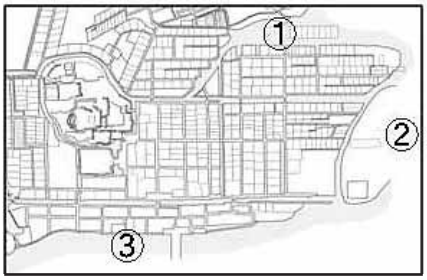

図10　絵図に描かれた漁の風景